

アルゼンチンにおける二つのキルチネル政権の政治戦略(論考)

著者	篠崎 英樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	25
号	2
ページ	2-15
発行年	2008-11-20
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00029290

アルゼンチンにおける 二つのキルチネル政権の政治戦略

篠崎英樹

はじめに

2001年12月、銀行口座の部分的凍結をきっかけとした社会騒擾やデフォルトといった未曾有の国家危機を経験したアルゼンチンは、紆余曲折を経たものの、今日⁽¹⁾に至ってはとりあえず安定を取り戻している。政治的には、国家危機を招いたデラルア(Fernando de la Rúa)アリアンサ政権⁽²⁾の崩壊後、アドルフォ・ロドリゲスサア(Adolfo Rodríguez Saá)ペロニスタ党(Partido Peronista。現在名は正義党 Partido Justicialista)暫定政権が党内の反発にあい1週間という短命政権に終わり、ドゥアルデ(Eduardo Duhalde)ペロニスタ党暫定政権へとバトンは引き継がれた。そのドゥアルデ暫定政権が史上空前の国家危機から脱し、回復基調への道筋を整えた後の2003年5月、当初は泡沫候補と見られていた同じペロニスタ党のキルチネル(Néstor Kirchner)候補が、ドゥアルデ暫定大統領の全面的支持を得て大統領に就任した。ドゥアルデ暫定政権からの経済情勢の好転⁽³⁾に加え、キルチネル大統領の巧みな政権運営による国民の人気も伴い、2007年大統領選挙では、キルチネル大統領夫人であるクリスティーナ(Cristina Fernández de Kirchner)候補⁽⁴⁾が圧勝し、ここにアルゼンチン史上初めて選挙による女性大統領が誕生した。

本稿では、このような政治的潮流の中、政権発

足当初の脆弱な政治基盤を見事に克服し政治的成功を収めたネストルとクリスティーナによるキルチネル両政権の政治戦略がいかなるものかを検証する⁽⁵⁾。まず、本稿のキー概念となる「地方ボス」について説明し、次にキルチネル大統領が自らの所属政党であるペロニスタ党ではなく、コンセルタシオン(Concertación)と呼ばれる他の政治勢力との協力を目指した背景を探る。その後、政党横断型の政治勢力の成立が2007年大統領選挙でクリスティーナ候補の勝利に結びついた過程をたどり、最後にクリスティーナ政権における輸出税制度改革をめぐる、盤石と思われたコンセルタシオンに亀裂が生じる流れを概観する。

I 地方ボス⁽⁶⁾

地方ボスとは、地方において絶対的な政治的権力を有する人物または一族のことを指す⁽⁷⁾。地方ボスと考えられる指標としては、州知事職の連続再選(そのための州憲法改正)、選挙における候補者リストの独占的作成、親族からの州政府高官の登用、長期間にわたる党州支部代表の就任、が想定される。

地方ボスの具体例としては⁽⁸⁾、メナム(Carlos Menem、ラリオハ州知事：連続2期を含む3期9年、大統領：連続2期10年)、ドゥアルデ(ブエノスアイレス州知事：連続2期8年、暫定大統領：2年5カ



政治集会で前キルチネル大統領(中央)が支持者に応えるのを見守るクリスティーナ大統領(左)(2008年3月27日)(© AP Images)

月), キルチネル(サンタクルス州知事: 連続3期12年, 大統領: 1期4年), プエルタ(Ramón Puerta, ミシオネス州知事: 連続2期8年), デラソタ(José Manuel de la Sota, コルドバ州知事: 連続2期8年)が挙げられる。とりわけ, メナムとドゥアルデは大統領職を終えた後も地元の州で権力を保持した。

また一族という点では, カタマルカ州のサアディー族, サルタ州のロメロー族, サンルイス州のロドリゲスサア一族が該当する。サアディー族では, ビセンテ・サアディ(Vicente Saadi, 州知事: 2期2年)と息子ラモン・サアディ(Ramón Saadi: 2期7年)が, ロメロー族ではロベルト・ロメロ(Roberto Romero, 州知事: 1期4年)と息子フアン・カルロス・ロメロ(Juan Carlos Romero, 連続3期12年)が, ロドリゲスサア一族では, 兄アドルフォ・ロドリ

ゲスサア(州知事: 連続5期18年, 暫定大統領: 1週間)と弟アルベルト・ロドリゲスサア(Alberto Rodríguez Saá, 州知事: 連続2期5年目中)が当てはまる。

では, 地方ボス概念を通じて, キルチネル政権の政治戦略を分析する意味はどこにあるのであろうか。今日において, ペロニスタ党が唯一政権運営能力を有する状況下で, 1990年代以降の同党出身の大統領は全て地方ボスに分類され, 政策面でも国政に大きな影響力を及ぼしている⁽⁹⁾。そうであるならば, キルチネルとクリスティーナの両政権の成功の可否は, 地方ボスの支持をいかに獲得するかにかかると言っても過言ではなからう。過去, メナム政権にしる, デラルア・アリアンサ政権にしる, 最終的には地方ボスの支持を失うこ

とで困難な局面に直面し、デラルア・アリアンサ政権に至っては任期半ばの辞任を強いられた。それは、地方ボスの支持を失うことで、政権基盤が脆弱化し、政権運営に支障をきたすことを意味する。裏を返せば、地方ボスの支持を得ている間は、政権基盤は安定するということである。

II コンセルタシオン結成に至る背景

1. キルチネル政権の誕生⁽¹⁰⁾

ドゥアルデ派依存体質

2003年4月、決選投票のライバルであったメナムの出馬辞退に伴い、キルチネルは大統領に選出された⁽¹¹⁾。とはいえ、キルチネルが自力で大統領の座を射止めたのではなく、むしろ当時の暫定大統領であったドゥアルデが政敵メナムの勝利を是が非でも阻止するためにキルチネルを担ぎ出したのであった。事実、ドゥアルデは当初、コルドバ州の地方ボスであるデラソタ州知事を後継者に指名したが、世論調査での結果が好ましくないことから諦め、政策の違いを度外視した苦肉の策としてサンタクルス州の地方ボスであるキルチネル州知事に白羽の矢を立てたのである。

その結果、キルチネル大統領は発足当初からブエノスアイレス州の地方ボスであるドゥアルデに依存することとなり、それは閣僚人事で顕著となる。キルチネル大統領は、経済政策の策定、経験の乏しい州知事との交渉および議会運営での弱点を補うべく、経験豊富で政治的影響力を持つドゥアルデ派の助けを借りざるを得なかった。要となる経済大臣のポストには、ラバーニャ(Roberto Lavagna)が留任したほか、大統領府長官(2002年1~4月)および生産大臣を務めたアニバル・フェルナンデス(Anibal Fernández)を内務大臣に、パンプーロ(José Pampuro)大統領府長官(2002年10月

~2003年5月)を国防大臣に登用した。

もちろん、キルチネル大統領のサンタクルス州知事時代からの側近がそのまま入閣する場合もあった。例えば、政権の目玉ともいえる公共事業大臣には長年の親友であり州の官房長官を務めたデビド(Julio De Vido)を、社会開発大臣には実姉であるアリシア・キルチネル(Alicia Kirchner)を、省庁間の調整役である首相には、大統領選挙で選挙参謀を務めたアルベルト・フェルナンデス(Alberto Fernández)を任命した⁽¹²⁾。

このように政権発足当初より、キルチネル政権のドゥアルデ派依存体質は少なからず存在した。よって、キルチネル大統領がまず取り組むべき課題は、ドゥアルデ派への依存体質から脱却し、自らの政治基盤を構築、強化することであった。そこで採用された戦略は、ペロニスタ党内でキルチネル派が主導権を握ると同時に、党外の政治勢力やこれまで政治に参加してこなかった人々を結集することであった。

2. 脱ドゥアルデ派の試み

キルチネル派の結成

キルチネル派結成の最初の段階として、キルチネル大統領が2003年12月に結成したのが、自派勢力の全国展開を目的とした勝利のための政党(PV: Partido para la Victoria)⁽¹³⁾であった。その構成は、カラファテ・グループ(Groupo Calafate)をはじめ、ミケランジェロ・グループ(Groupo Michelángelo)、合流グループ(Groupo Confluencia Argentina)であった。ミケランジェロ・グループには、ほとんどのメンバーがペロニスタ党出身で占め、のちに政府高官に就くクンケル(Carlos Kunkel)大統領府次官、タイアナ(Jorge Taiana)外務大臣が、合流グループにはもともとペロニスタ党員であったがのちに中道左派勢力フレパソで活動したピエルサ(Rafael

Bielsa)前外務大臣がいた。

キルチネル大統領が自派勢力の結成を始めたとはいえず、ペロニスタ党内の情勢には大きな変化はなかった。2004年3月、しばらく空席であった党首をはじめとする執行部を選出するために党大会が開催された。この党大会におけるキルチネル大統領の目的は、キルチネル派で執行部を牛耳ることであった。しかしながら、地方ボスを中心とする党の要人は大統領としてキルチネルを認めながらも、党の指導者としてはまだ認めていなかった。

党大会には多数を占めるドゥアルデ派、新たに誕生したキルチネル派、その他の地方ボスを中心とするグループが出席した。大会は、キルチネル派がドゥアルデ派に挑む形で進行して、クリスティーナとドゥアルデ夫人のチチェ・ドゥアルデ(Hilda "Chiche" González de Duhalde)との批判合戦に終始し、パロディー化した。いくら党大会で批判を展開しようとも、まだ党内での盤石な勢力構築まで至っていなかったキルチネル派は、最終的には具体的な成果なしに大会を去るしかなかった。ただし、クリスティーナが「我々は別の政党を結成する歴史的好機にある」(*La Nación*, 27 de marzo de 2004)と述べているように、キルチネル派のドゥアルデ派への挑戦の意向は明確なものとなった。

結局、党大会では、具体的な党の方針は決められず、新執行部の選出のみに終わった。新執行部役員には、党首にフェルネル(Eduardo Fellner)フイ州知事、4名からなる副党首にはソラ(Felipe Solá)ブエノスアイレス州知事、オベイドウ(Jorge Obeid)サンタフェ州知事、ロメロ(Juan Carlos Romero)サルタ州知事、ダスネベス(Mario das Neves)チュブット州知事が就任した。その他、注目すべきポストとして、幹事長にはドゥアルデ派重鎮のエドゥアルド・カマーニョ(Eduardo Camaño)下院議長が任命された。この構成は、ロメロとい

った地方ボスや内陸部の州知事を除くと、ソラ、カマーニョとドゥアルデ派寄りであることには間違いなかった。

党大会終了直後、キルチネル大統領は新執行部の構成に関し、顔ぶれが古い政治家が多く不満であると抗議し、キルチネル派寄りのダスネベス副党首らを辞職させた。それに対し、ドゥアルデ派のソラ副党首が抗議の意を込めて辞任したほか、ついにはフェルネル党首の辞意表明にまで至った。最終的にはペロニスタ党の党首不在状況は続くものの、キルチネル派とドゥアルデ派の勢力関係は、ドゥアルデ派に分があった。

3. キルチネル派の攻勢 2005年中間選挙

ペロニスタ党は、党大会で、新執行部を選出し、党の正常化を目指したものの、キルチネル派とドゥアルデ派との対立で失敗に終わった。引き続き党首は不在の状態が続いたが、2005年9月、連邦判事がペロニスタ党に干渉し、中期的に執行部選出選挙を行うこと、それを担当する干渉人(interventor)を指名するとの命令を下した。特に干渉人がキルチネル大統領に近い人物だと目されたこともあり、キルチネル派が司法に手を回しドゥアルデ派を追放する意向であると、反キルチネル派の指導者は強く抗議した。そうした中、最初の機会が到来したのは、2005年10月の中間選挙におけるブエノスアイレス州選挙区での両派の攻防である。

キルチネル大統領は、政権発足直後からドゥアルデ派の勢力低下に着手した。ドゥアルデを隣国ウルグアイにあるメルコスール事務局委員長に就任させて国内政治から遠ざける一方、ドゥアルデ派要人を切り崩しにかかった。その策として、まずキルチネル大統領が選んだのは、ドゥアルデ派のソラ州知事を味方につけることであった。そも

そもソラ州知事は、ドゥアルデの庇護の下、副州知事と州知事を務め、2003年に再選されていた。とはいえ、キルチネル大統領以上にドゥアルデへの依存体質が強かった。2007年に州知事職の任期を終えることとなるソラ州知事は、影響力を保持するため、州内において自派勢力を結成し、少しでもドゥアルデに対して発言力を高める必要があった。そこにキルチネル大統領とソラ州知事の思惑が一致し、ソラ州知事は2004年12月についてソラ派を立ち上げ、ドゥアルデ派批判を展開した。

こうしてキルチネル派の攻勢が強まる中、キルチネル大統領とドゥアルデによる直接協議の下で中間選挙に向けた連邦議員候補者リストの作成が始まった。ところが、両者ともに一歩たりとも譲歩せず、結局、キルチネル大統領は、勝利のための戦線からクリスティーナ上院議員を出馬させることにした。この当時クリスティーナは、サンタクルス州選出であったが、出生地がブエノスアイレス州であることから被選挙権を有しており、大胆な「国替え」を実行した。また、もう一人の候補には、もともとドゥアルデ派だったバンブーロ国防大臣を据えた。他方、ドゥアルデ派が牛耳る州支部は、公認候補としてチチェ・ドゥアルデ下院議員を候補者に選出した。

下院議員候補では、もともとドゥアルデ派であり、人口200万を有する州最大のラマタンサ市の市長を務めたバレストリニ(Alberto Balestrini)がキルチネル派リスト上位に加えられた。世論調査の結果では、カリスマ性を有するクリスティーナ候補の優勢が伝えられた。ドゥアルデ派にとっては、ソラ派の台頭およびラマタンサ市のように州内最大票田区の取りまとめに失敗したことも不利な状況をもたらした。

そうした中の2005年10月、中間選挙が実施され、予想どおりクリスティーナ候補(46%)がチチェ・

ドゥアルデ候補(20%)に大差で勝利した。このキルチネル派の勝利は、党内の主導権争いにおいて大きな意味合いを持った。キルチネル派はドゥアルデ派でまとめられていたブエノスアイレス州支部に切り込むことに見事に成功したのであった。

III コンセルタシオンの結成 - 2007年大統領選挙

1. コンセルタシオンの結成

2005年中間選挙でキルチネル派が躍進したとはいえ、キルチネル派とドゥアルデ派を中心とする反キルチネル派との最終決着には至らなかった。例えば、議会会派内での対立は続き、2006年4月、司法審議会改革法案をめぐる、反キルチネル派がペロニスタ党下院会派を離脱し、独自の会派を結成した。その新会派は、全国ペロニスタ党会派(Bloque Justicialista Nacional)と呼ばれ、ドゥアルデ派、メナム派、ロドリゲスサア派が中核となった。他方、キルチネル派は、対抗して連邦ペロニスタ会派(Bloque Justicialista Federal)を結成し、ドゥアルデ派要人であったバンカラリ(José María Díaz Bancalari)を院内総務に据えた。

地道な切り崩し作戦を経て、キルチネル大統領は、2006年5月22日、2007年大統領選挙を見据えて、結集という意味の政党横断型政治勢力コンセルタシオンを立ち上げた。多くの出席者のなかでも最も注目された人物は、最大野党急進党のコボス(Julio Cobos)メンドサ州知事であった。他方、ドゥアルデ派が中心の反キルチネル派は、エル・ヘネラル(El General)¹⁴⁾という政治勢力を立ち上げ、2007年の大統領選挙に向けてラバーニャ前経済大臣を担ぎ出すための準備を始めた。

党首不在でかつ党内は二分される状況において、党を正常化する動きが始まった。まずサルタ州の

地方ボスであるロメロ州知事のイニシアチブにより、2006年9月にシンポジウムが開催され、宣言文が採択された。その中で、党首不在の事態を解決し、党の正常化に向けて、司法の判断、つまり執行部選出選挙を実施することで党内民主主義を順守するよう主張した。出席者の中には、ミシオネス州の地方ボスであるプエルタ前州知事がおり、欠席したもののサンルイス州の地方ボスであるアドルフォ・ロドリゲスサア上院議員が書簡で支持表明を行った。この反キルチネル色の強いシンポジウム開催の背景には、キルチネル派が進めるコンサルタシオンが、地方におけるペロニスタ党の政治的重要性を失わせるという地方指導者らの懸念があった。

その流れで、2007年大統領選挙において反キルチネル勢力を結集させる目的で2006年11月にプエルタが中心となって、ペロニスモ・デ・ピエ (Peronismo de Pie) を立ち上げた。プエルタは、今後、幅広く他の勢力に具体的な参加を呼びかけるとともに、ペロニスタ党の正常化を要請した。

反キルチネル派で有力な大統領候補であったラバーニャは2007年5月10日、国家前進同盟 (UNA: Concertación para Una Nación Avanzada) を立ち上げた。決起集会には、ドゥアルデ派の要人に加え、急進党の歴史的指導者アルフォンシン (Raúl Alfonsín) 元大統領とモラレス (Gerald Morales) 急進党党首が出席した。これはまさにキルチネル大統領が構築している中道左派政治勢力コンサルタシオンに対抗する中道右派政治勢力にほかならず、コンサルタシオン同様、政党横断型であった。

また、メナム派とロドリゲスサア派のあいだでも協議が始まり、同年6月にメナム上院議員とアドルフォ・ロドリゲスサア上院議員、そして弟のアルベルト・ロドリゲスサア・サンルイス州知事で会合を持ち、党の正常化および大統領選挙での協

力の可能性を議論した。さらに、キルチネル政権に難色を示しながらも、明確な発言を避けていたドゥアルデは、大統領選挙の前哨戦と位置づけられた地方選挙で立て続けにキルチネル派が敗北したのを受けて、キルチネル大統領に対してクリスティーナを大統領候補とすることを再検討し、行政職の経験のある人物を指名するよう促した (*La Nación*, 27 de junio de 2006)。このように、反キルチネル派は、個々の地方ボスがキルチネル派対立候補の擁立に動き一本化できなかった。

大統領選挙に向けて対立候補の調整に失敗したとはいえ、党内の反キルチネル派による政治的パフォーマンスは収まる気配はなかった。2007年7月6日には、アドルフォとアルベルト・ロドリゲスサア兄弟主導の下、地元サンルイス州で反キルチネル色のペロニスタ党大会が開かれた。出席者の中には、メナム、プエルタ、ラモン・サアディといったペロニスタ党の地方ボスが参加した。その他には、オブザーバーとして中道右派政党から、ネウケン州地方政党であるネウケン人民運動 (Movimiento Popular Neuquino) の指導者ソビッチ (Jorge Sobisch) をはじめ民主中道同盟 (Ucedé: Unión de Centro Democrático) と共和国行動党 (Acción por la República) の指導者が出席した。この党大会の目的は、なによりも党の正常化であり、そのための新執行部の選出であった。具体的には地方24支部の代表による政治活動委員会 (CAP: la Comisión de Acción Política) の設置が承認され、執行部および大統領候補選出のための予備選挙の実施および30日以内に改めて党大会を実施することも決定された⁽¹⁵⁾。

引き続いて2007年7月12日、メナム、アドルフォ・ロドリゲスサア、ソビッチら反キルチネル派要人は、会合を開き、キルチネル大統領とクリスティーナ大統領候補に対する党籍剥奪、キルチネ

ルが事実上指名したと言われる党干渉人の罷免、新執行部および大統領候補選出選挙の実施を訴えた。このように党内の反キルチネル勢力は、キルチネルへの抗議運動を展開するものの、法的根拠はなく単なる政治的パフォーマンスに終止した。

2. コンセルタシオンの強化

急進党キルチネル派との選挙協力

2007年7月19日、クリスティーナは、出馬表明のための集会を開き、変革を旗印にするとともに、キルチネル政権の改革路線の継続を主張した⁽¹⁶⁾。ここでの変革とは、善悪二元論に基づき、反キルチネル派に属するドゥアルデ、メナム、アドルフ・ロドリゲスサアといった歴代大統領を旧態依然とした政治家で、自らが新しい政治家であるとして政界を刷新することを意味した。その会場には、キルチネル政権の全閣僚と17名の州知事⁽¹⁷⁾が出席した。それ以外にも、多数の元ドゥアルデ派要人と中道左派勢力の指導者が参列し、政党以外では、五月広場の祖母たち、および五月広場の母たちの代表、そして労働組合の指導者が出席した。

これに対し、反キルチネル派、とりわけドゥアルデ派は、急進党との政治協力に成功し、ラバーニャ前経済大臣の擁立に成功した。同年7月21日、副大統領候補に指名されたモラレス急進党党首の地元、フワイ州で出馬表明を行い、その場にはドゥアルデ派と急進派の要人が出席した。

その後、キルチネル派と反キルチネル派による政治集会は繰り返され、8月14日には、クリスティーナ・キルチネル大統領候補と急進党キルチネル派(Radical K)のコボス副大統領候補の揃い踏みで決起集会が行われた。集会は、キルチネル大統領、多くの州知事、ほぼ全員の閣僚のほか、急進党キルチネル派から3名の州知事が出席した。クリスティーナ候補の演説中には、今回の急進党

キルチネル派との協力を正当化するため、ペロニスタ党創始者ペロン(Juan Domingo Perón)と急進党指導者バルピン(Ricardo Balbín)が過去、政治協力しようとした時の映像を大型スクリーンから流れた。また、ペロンの妻であり、国民的に人気のあるエビータ(Eva Perón)の写真をステージに掲げ、女性票の獲得を狙った。

このようにキルチネル派は、クリスティーナ大統領候補で一致団結して選挙に挑む体制を構築したが、他方、反キルチネル派は候補者の一本化に難航した。メナム派、ロドリゲスサア派、プエルタ派が中心となって協議を進めたが、意見をまとめることに失敗、結局、ドゥアルデの推すラバーニャ候補に加えて、サンルイス州知事のアルベルト・ロドリゲスサアがメナム派の支持を得て、大統領選挙への出馬を表明した。

その他の対立候補の動向としては、急進党は最終的には党分裂を免れず、独自の候補擁立に失敗した。キルチネル大統領のコンセルタシオンに呼応する形で、指導者の一人であるコボス・メンドサ州知事が2006年5月に、早々とキルチネルの大統領再選支持を表明した。そのまま、コボスが中心となって急進党キルチネル派が同年8月に結成され、当時の党執行部に反発した4名の州知事が加わった。当然のことながら、イグレシアス(Roberto Iglesias)党首⁽¹⁸⁾は急進党キルチネル派の動きを牽制した。その後、大統領選挙の候補者選定の難航や党内対立により、イグレシアスは辞任に追い込まれ、党は混沌とした。同年12月には執行部会合が開かれ、モラレス上院議員が後任に選出された。モラレスはイグレシアス同様、内陸州の指導者で構成されたグループに属していたが、主流派とキルチネル派の両派に通じる関係を持ち、党内勢力の均衡を図るうえでは適材適所の人事であった。

大統領候補をめぐる急進党内の動きは、キルチネル派がキルチネル大統領支持を表明する一方、モラレス党首は2006年12月、ラバーニャ前経済大臣への支持を決定し、他の政治勢力との協力を目指すことを表明した。2007年3月に党大会が開催され、急進党キルチネル派欠席の下、党としてラバーニャ前経済大臣を大統領候補として推薦することを決定した。そして6月にはモラレス党首がラバーニャの副大統領候補に指名され、翌月にはコボスがクリスティーナの副大統領候補の受諾を表明した。急進党キルチネル派が開催した党大会では、クリスティーナ大統領候補への支持を確認した。もちろん、このキルチネル派の動きに対して、執行部は、コボスがクリスティーナの副大統領候補となり、党内に混乱をもたらしたとして党員資格の停止処分を科し、党倫理委員会は9月には党員資格の剥奪を決定した。

急進党以外で注目すべき候補者として、前回の大統領選挙で5位(14%)に終わった中道左派勢力の市民連合(Confederación Coalición Cívico)のエリサ・カリオ(Elisa Carrió)、同じく前回の大統領選挙で3位(16%)と善戦した成長のための再建党(Recrear para el Crecimiento)のリカルド・ロペス・ムルフィ(Ricardo López Murphy)が挙げられる。しかしながら、両候補者ともクリスティーナ大統領候補の有力な対立候補としてまでは一般的に見られていなかった。

3. コンサルタシオンの確立

2007年大統領選挙

2007年10月、大統領選挙が行われ、クリスティーナ大統領候補は、彼女自身のカリスマ性、キルチネル政権への国民の支持および対立候補の分裂により、2位のカリオに大勝した(表1参照)。他方、ペロニスタ党ドゥアルデ派と急進党主流派の

表1 2007年大統領選挙の結果

候補者名(登録政党および同盟名)	得票率(%)
クリスティーナ・キルチネル (勝利のための戦線)	45.29
エリサ・カリオ(市民連合)	23.04
ロベルト・ラバーニャ(国家前進同盟)	16.91
アルベルト・ロドリゲスサア (正義・団結・自由戦線)	7.64
フェルナンド・ソラナス(真正社会党)	1.58
リカルド・ロペス・ムルフィ (成長のための再建党)	1.43
その他	4.11

(出所) Ministerio de Interior(www.ministerio.gov.ar
2008年5月10日アクセス)

支持を得たラバーニャと前回の大統領選挙で善戦したロペス・ムルフィは惨敗した。

選挙区別で見ると、クリスティーナは、ブエノスアイレス州ではドゥアルデ派の切り崩しや彼女自身の選挙区の「国替え」などの戦略が功を奏して多くの支持を獲得するとともに、地方票を手堅くまとめた(表2参照)。とりわけ、サンチアゴエルエステロ州では79%、サルタ州では75%、フォルモッサ州では74%と高い得票率を獲得した。ただし、キルチネルが2003年の大統領選挙で都市部の票を集めたのに対し、クリスティーナは、ブエノスアイレス市、コルドバ州で苦戦し、最多得票率を得ることはできなかった。また、サンタフェ州では勝利したものの、同州最大の都市であるロサリオ市では敗北した。サンルイス州では、ペロニスタ党のアルベルト・ロドリゲスサアが勝利しているが、これは地方ボスであるロドリゲスサア兄弟の影響力がいかに強固なものであるかを示している。

上下両院議員選挙では、上院議員の3分の1、下院の半数の議席が改選され、上下両院ともキルチネル派が多数を占めた。上院は74議席中47、下院では257議席中160を獲得し、政権運営において

表2 2007年大統領選挙における選挙区別得票率

選挙区	最多得票候補者名	得票率(%)	有権者全体に占める有権者数の割合(%)
ブエノスアイレス州	クリスティーナ・キルチネル	45.91	37.3
ブエノスアイレス市	エリサ・カリオ	37.78	10.3
サンタフェ州	クリスティーナ・キルチネル	35.50	8.8
コルドバ州	ロベルト・ラバーニャ	35.31	8.8
メンドサ州	クリスティーナ・キルチネル	60.94	4.2
トゥクマン州	クリスティーナ・キルチネル	62.68	3.4
エントレリオス州	クリスティーナ・キルチネル	45.52	3.2
サルタ州	クリスティーナ・キルチネル	75.77	2.6
チャコ州	クリスティーナ・キルチネル	49.52	2.5
コリエンテス州	クリスティーナ・キルチネル	54.13	2.4
ミシオネス州	クリスティーナ・キルチネル	69.28	2.3
サンチアゴデルエステロ州	クリスティーナ・キルチネル	79.48	2.0
サンフアン州	クリスティーナ・キルチネル	58.24	1.6
フワイ州	クリスティーナ・キルチネル	61.96	1.4
リオネグロ州	クリスティーナ・キルチネル	56.85	1.4
ネウケン州	クリスティーナ・キルチネル	37.19	1.2
フォルモッサ州	クリスティーナ・キルチネル	74.14	1.2
チュブット州	クリスティーナ・キルチネル	66.29	1.1
サンルイス州	アルベルト・ロドリゲスサア	68.19	1.0
ラパンパ州	クリスティーナ・キルチネル	48.08	0.9
カタマルカ州	クリスティーナ・キルチネル	53.25	0.8
ラリオハ州	クリスティーナ・キルチネル	48.79	0.7
サンタクルス州	クリスティーナ・キルチネル	68.47	0.5
ティエラデルフエゴ州	クリスティーナ・キルチネル	54.61	0.3

(出所) Ministerio de Interior (www.ministerio.gov.ar 2008年5月10日アクセス)

「有権者数の割合」は、Centro de Estudios Nueva Mayoría (<http://www.nuevamayoria.com/ES/> 2003年8月25日アクセス) の資料を基に作成。

(注) 上位4選挙区が都市部に該当する。

好材料を得た。

2007年に行われた州知事選挙⁽¹⁹⁾では、ペロニスタ党がコルドバ州、エントレリオス州、ラリオハ州、サンフアン州、サンルイス州、ラパンパ州を、急進党キルチネル派がカタマルカ州とリオネグロ州を獲得した。ティエラデルフエゴ州、ブエノスアイレス市、サンタフェ州、ネウケン州では、それぞれ共和国平等党、中道右派の共和国提案党(PRO : Propuesta Republicana), 左派勢力の市民・社会進歩戦線(Frente Progresista Cívico y Social), 地方政党のネウケン人民運動が勝利した。

政党別での州知事出身は明確になるものの、詳細を見ると複雑な様相を呈していた。例えば、2007年3月に行われたカタマルカ州知事選挙では、反キルチネル派のペロニスタ党公認候補に対し、キルチネル大統領は主要野党勢力を結集させ20ポイント以上の差をつけて勝利した。6月のブエノスアイレス市長選挙では、キルチネル派が主導権を握るペロニスタ党支部の支持を得た候補が、地元名門サッカーチームであるボカジュニアーズの社長を務める共和国提案党のマクリ(Mauricio Macri)に決選投票で敗れた。その他の選挙区では、

キルチネル派はブエノスアイレス市長選挙のように、ペロニスタ党と選挙協力をを行い、また時には急進党候補を支持したりし安定した選挙戦を展開した。唯一の例外を言えば、先述したサンルイス州であり、地方ボスであるロドリゲスサア兄弟は、キルチネル派候補の擁立を事実上跳ねのけ、現職のアルベルト・ロドリゲスサアが85%という驚異的な得票率を得て再選された。

地方ボスとの関係では、ラリオハ州の地方ボスであったメナムは、州知事選挙に出馬するもののキルチネル派候補に大敗し、地方ボスとしての地位が安泰ではなくなった。他方、前述したロドリゲスサア兄弟は、確固たる勢力を維持し、コルドバ州のデラソタは、州憲法の規定で連続3選が禁止されていることから、側近を擁立し、キルチネル派の支持を得て勝利させた。デラソタは、直接的には州知事の職に就いていないとしても、州政府の人事および政策決定に影響力を保持した。

4. 次なる戦略への布石

キルチネル派党執行部の誕生

ペロニスタ党内の指導力を確立し、クリスティーナ政権の政治基盤を確固たるものにすることを試みるキルチネル大統領は、まず自らが党首となることを目指した。その手始めとしてキルチネルは、2008年3月7日に党大会を実施することに成功し、執行部選出選挙に関し、候補者リストの提出期限と選挙日を定めた。また同時に、党大会役員を選出し、大会議長にインスフラン(Gildo Insfran)フォルモッサ州知事を事実上任命するなど、キルチネル派に近い指導者で固めた。

長年空席であった党首の選出選挙の道筋が決定し、候補者はキルチネル派からキルチネル本人が、反キルチネル派からはロドリゲスサア派のマヤ(Héctor Maya)上院議員が挑んだ。ところが同年4

月22日、党の選挙管理委員会は、出馬の条件である全党員の2%の署名と州を単位とする地方5支部の代表の推薦を満たしていないとして、マヤの出馬を無効と判断し、この時点で自動的にキルチネルの党首選出が決定した。

2008年5月14日、新執行部就任式が行われ、ここにキルチネルが正式に党首に就任した。それ以外のポストでは、筆頭副党首にシオリ(Daniel Scioli)ブエノスアイレス州知事⁽²⁰⁾、幹事長にアルベルト・フェルナンデス首相と、当然のことながらキルチネル派の要人で固められた。このように、キルチネルは、ついに公式に党内の主導権を獲得したのであった。

IV コンセルタシオンの試練

- 輸出税制度改革をめぐる地方ボスの抵抗

クリスティーナの大統領選挙での勝利によってコンセルタシオンはさらに強固なものとなった。そうした中、キルチネルとクリスティーナの政治戦略は、キルチネルのペロニスタ党党首就任から考慮すると、党内の主導権をより一層確固たるものにすることが見て取れる。それは、キルチネルが党内をまとめて、クリスティーナが政権運営に集中する「夫婦分業」戦略といえる。ただし、この戦略も、以下に述べる輸出税制度改革をめぐる抗争により出鼻を挫かれることとなる。

クリスティーナ政権の船出は、政策および閣僚人事が基本的にはキルチネル政権を踏襲したことで真新しい点が少なく、また緊急に対応する問題がなかったことで穏やかなものに見えた。ところが、クリスティーナ大統領は政権発足4カ月目の2008年3月、大きな試練を迎えた。それは、穀物に対する輸出税制度の改正、具体的には税率を固定するのではなく、国際価格に比例して税率を変

更なる趣旨の改革をめぐるクリスティーナ政権と地方ボス、その背後に存在する農牧団体とが激しく対立したのである。そもそもこの輸出税は、2001年の国家危機に際し、脆弱な財政基盤を強化するため、穀物等の国際価格の上昇によって恩恵を受けていたセクションを中心に課した税金のことである。例えば、2008年2月の市場価格を基に算出すると、大豆は35%から44.1%へと9ポイント上昇することとなる⁽²¹⁾。これに対して、全国規模の主要農牧4団体はストライキをはじめ、道路を封鎖して抗議運動を展開した。他方、クリスティーナ政権は強硬な姿勢を崩さず、大統領自ら農牧団体の抗議運動を痛烈に非難した。両者の対立が収まる気配はなく、ますます混乱の度合いが高まる中、両者はとりあえずテーブルにつき交渉を始めるものの、その溝は埋まることはなく、逆に妥協点が見つけられないことで危機感が募った。

交渉決裂後、農牧団体は抗議運動を再開した。幹線道路の封鎖や食糧品取引の一時中断により、都市部への食糧品販路が断たれた結果、国民の不満が募り⁽²²⁾、その矛先が徐々に政権へと向けられるようになったことで、ついにクリスティーナ政権は態度を軟化させざるを得なくなった。ただし、大統領職を退いた後、基本的にはクリスティーナ政権に対して静観する姿勢を貫いていたキルチネルが、妻の苦慮を見てか、ついにペロニスタ党党首として沈黙を破り、農牧団体を厳しく批判し始めた。具体的には2008年5月27日、党首として執行部会合を招集し、執行部声明として、クリスティーナ政権の改革案の正当性を指摘するとともに、農牧団体やそれと抗議運動を共にする政治勢力の主張に反論し、非難した(Partido Justicialista[2008])。

このようにキルチネル派と反キルチネル派の攻防は続くのだが、ここで一度地方ボスの動向を整理したい。2007年大統領選挙時において、地方選

挙での勝利を優先したこともあり、ドゥアルデ、メネム、ロドリゲスサア兄弟、ロメロ以外の多くは、クリスティーナを支持した。ところが、一旦新政権が発足し、地方の政治情勢が変わると、地方ボスや有力な地方政治家の対応は異なっていく。例えば、ペロニスタ党内の情勢に限定すると、デラソタの影響下にあるスキアレッチェ(Juan Schiaretti)コルドバ州知事は当初から様子見を兼ねて中立の立場をとった。

しかし、地方経済または地方選挙において大きな存在である農牧団体の意見を無視することはできず、態度を変える指導者も現れた。例えば、ウリバリ(Eduardo Uribarri)エントレリオス州知事はブスティ(Jorge Busti)前州知事の、ウルトゥベイ(Juan Manuel Urtubey)サルタ州知事は地方ボスであるロメロ前州知事、前述のスキアレッチェ・コルドバ州知事はデラソタ前州知事の意向を踏まえて批判的立場を取るようになった。その他、地方ボスのアルベルト・ロドリゲスサア・サンルイス州知事をはじめ数名の州知事が次々と批判した。その中でも特に注目されたのは、サンタフェ州知事を2期務めたにもかかわらず積極的な政治活動を慎んでいたレウテマン(Carlos Reutemann)がクリスティーナ政権への姿勢を硬化させたことだった。そして最終的にはドゥアルデ自身もクリスティーナ政権の政策および対応を「(クリスティーナ政権のやり方は、)反民主主義的である。」として反対する意向を表明するに至った(*La Nación*, 1 de junio de 2008)。

政府と農牧団体との調整が失敗したものの、政府は修正を加えたうえでの法案可決を目指した。2008年7月3日には、下院農牧委員会と予算・財政委員会からなる合同委員会で、クリスティーナ政権が提出した輸出税制度改正法案の修正法案が賛成多数で可決された。修正法案は下院本会議に

送付され、19時間の審議を経て採択がなされた結果、出席議員254名(総数257名)のうち、賛成129票、反対122票、棄権2という7票差の賛成多数で可決された⁽²³⁾。ただし、反対票を投じた議員の中には、ソラ(前ブエノスアイレス州知事)や急進党キルチネル派の議員ら14名のキルチネル派が含まれた。特にクリスティーナ政権が危惧したのは、コボス副大統領の影響下にある議員が反対票を投じたことであった。

議論の場が上院に移った後、キルチネルが、党首としての立場を利用して、大統領府前の広場で政府支持集会を実施する一方、農牧団体は、法案反対の姿勢で抗議集会を開催し、対立は過熱化していった。2008年7月17日、多くの注目が集まる中、上院本会議で長時間審議が行われ、72名の全議員が投票した結果、賛成36、反対36の賛成・反対票が同数となった。この場合、憲法第57条に則り、上院議長である副大統領に賛否が委ねられることとなっており、コボス上院議長は、「クリスティーナ大統領は、私の決断を理解してくれるだろう。」と意見を述べ、反対票を投じ、輸出税制度改正法案は否決された(*La Nación*, 17 de junio de 2008)。

ここで反対票を投じた議員を見てみると、キルチネル派の議員2名以外でも、もともとクリスティーナ政権を支持していたペロニスタ党議員が含まれる。例えば、最終的に反キルチネル色を鮮明に出したレウテマンの影響下にあるサンタフェ州議員2名は特筆すべきである。もちろん、当初から反キルチネルであったサンルイス州、コルドバ州、ブエノスアイレス州、ラリオハ州の計5議員は反対票を投じた。投票結果からみて、最後のコボスの反対票につながったことを考慮すると、サンタフェ州の2票が大きな意味合いを持っていたことがわかる。

クリスティーナ政権にとってのこの敗北は大き

な代償を払うこととなった。まず、アルベルト・フェルナンデス首相が引責辞任した。議会においても反対票を投じたうち議員の何名かはキルチネル派会派を離脱した。もちろん、コボス副大統領の離反は痛手であった。クリスティーナ大統領はあからさまにコボス批判を行い、関係修復に動く気配はない。むしろ、コボスの側近である8名の政府高官を事実上更迭するなど厳しい対応を取った。そうした中、コボスは、2007年大統領選挙で仲たがいを急進党との接近を図っている。

この結末を受けてのキルチネルとクリスティーナの政治戦略は、コンセルタシオンから離脱するものを敢えて追わず、現在の勢力の結束を図ること、そして今回の一連の騒動で反キルチネル色を打ち出した州知事を再びキルチネル派を呼び寄せることである。クリスティーナ政権発足当初の「夫婦分業」体制は、早々に頓挫し、キルチネル党首は党内をまとめるだけでなく、クリスティーナ政権の政権運営に大きく関わるようになった⁽²⁴⁾。

おわりに

キルチネル政権発足当初、その政治基盤は脆弱で、ドゥアルデ派の影響力が大きかった。ペロニスタ党内の情勢に目を転じても同様であり、同じくドゥアルデ派の壁は高かった。それ故、キルチネル政権の政治戦略は党内での主導権争いと同時に他の政治勢力までその範囲を広げて「結集」を図る必要があった。キルチネル政権期に、ペロニスタ党内で、ある程度基礎固めができ、コンセルタシオンという形で他の政治勢力、とりわけ急進党の一部の組み入れに成功した。それが実を結ぶのは、2007年大統領選挙でのクリスティーナの勝利である。

コンセルタシオンのさらなる強化を模索するキ

ルチネルとクリスティーナは、キルチネルがペロニスタ党党首に就任し、党内基盤を盤石にする一方で、クリスティーナ大統領が政権運営に専念するという「夫婦分業」戦略をとった。しかし、輸出税制度改革をめぐる地方ボスとの対立は、思わぬ結果をもたらした。その失敗の要因には、地方ボスのクリスティーナ政権への対応の変更が大きく影響したことにあった。とりわけ当初は静観していたサンタフェ州のレウテマンが批判的態度へと方向転換したのは決定的であった。それは、コボス副大統領(兼上院議長)の反対票、すなわち法案の否決につながるからである。このコボス副大統領の離反は、単なる政策の失敗以上に、コボスの存在がコンセルタシオンの象徴であったことから、政治戦略において大きな痛手であった。

もちろん、今回の輸出税制度改革は、他の政策より地方の利益に与えるインパクトが大きいことから、地方ボスをはじめ州知事が過剰に反応した一時的な出来事かもしれない。しかし、これを契機として、反キルチネル勢力が巻き返しを図らないとまでは現時点では言いきれない。今後、コンセルタシオンがどのような体制で挑むのか、または反キルチネル勢力がどこまで団結するのかは、2008年11月のペロニスタ党ブエノスアイレス州支部執行部選出選挙を前哨戦として、2009年の中間選挙ではっきりするだろう。

注

- (1) 2008年9月15日時点における情勢をもとに分析している。
- (2) 急進党(Unión Cívica Radical)と中道左派勢力フレパソ(Frepaso : Frente País Solidario)による連立政権で、1997年に結成。
- (3) 2003年から2007年までのGDP成長率は年率平均9%の値を見せている。失業率は20%から9%

に、貧困率は50%から27%と大幅に低下している。

- (4) 本稿ではネストル・キルチネルをキルチネル、クリスティーナ・キルチネルをクリスティーナと略する。
- (5) キルチネル政権の概要、とりわけ経済、社会政策に関して要領よくまとめたものとしては、宇佐見([2005],[2006])の研究を参照されたい。
- (6) ペロニスタ党における地方ボスの台頭過程を論じたものとして以下を参照されたい(篠崎[2007])。
- (7) 地方ボス(boss provincial)という概念を使用する理由の一つは、今日でも使用されているカウディーヨ(caudillo)との混同を避けるためである。その区別は選出方法(任命制か直接選挙か)と軍事指導者としての性格の有無から判断する。もう一つの理由は、この概念には、州知事職の退官後も事実上権力を保持する人物または一族をも含み得るというメリットがある。
- (8) ここで列挙するのは、本稿に直接関連する人物および一族のみに限定する。
- (9) 地方交付税制度改革における地方ボスの動向を分析したものとして以下を参照されたい(篠崎[2008])。
- (10) 詳細は、篠崎[2003]を参照されたい。
- (11) 憲法では、当選の条件として、最多得票者候補の得票率が45%以上、もしくは40%以上で、第2位候補と10ポイント以上の差がある場合と規定されている。もし二つの条件に達しない場合、得票率上位2候補による決選投票が行われ、絶対多数得票者が当選するとなっている。
- (12) キルチネル周辺のグループとしては、カラファテ・グループ(Grupo Calafate)が挙げられる。そのリーダーは、もちろんキルチネルとクリスティーナである。メンバーの多くは、一旦ペロニスタ党を離党し、独自に活動をしていたところを、キルチネル大統領が政界に呼び寄せたのである。
- (13) この前身は、2003年大統領選挙のために結成した勝利のための戦線(Frente para la Victoria)であり、サンタクルス州のキルチネル派を主とした政治勢力である。その後、全国展開に成功するのだが、選挙に際しては党名ではなく、勝利のため

- の戦線の名を使用した。
- (14) エル・ヘネラルとは、ペロニスタ党創始者のペロンのことである。反キルチネル派は、我々がペロンの真なる後継者ということを訴えたかったのである。
- (15) その他、反キルチネル派は党紀委員会 (el Tribunal de Disciplina) を新設し、キルチネル派が党の紋章を使用することを禁止する思惑であった。
- (16) マスコミヤや政治評論家の憶測ではあるが、キルチネル大統領が再選を目指さなかった理由を以下のように挙げている。つまり、憲法では大統領職の連続3選を禁止していることから、キルチネル大統領は、自らが再選して、2011年大統領選挙でクリスティーナを擁立するより、今回はクリスティーナで、そして2011年に再び自分が出馬するほうが、長期的に「キルチネル」政権を維持できるという戦略を選択したからである。
- (17) ペロニスタ党のアルベルト・ロドリゲスサア・サンルイス州知事とロメロ・サルタ州知事、急進党の2名の州知事、地方政党のソビッチ・ネウケン州知事とブエノスアイレス市長の6名が欠席した。
- (18) イグレスィアスは、メンドサ前州知事であり、急進党メンドサ州支部内でも中央執行部レベル同様、コボスとの対立が激しくなっていた。
- (19) 州知事選挙などの地方選挙は、州憲法の規定に基づき、必ずしも大統領選挙と同一日に実施されるわけではない。
- (20) キルチネル政権の副大統領。
- (21) すべての品目の税率が上昇するのではなく、逆に小麦やトウモロコシの税率は減少すると結果が出ている。
- (22) クリスティーナ大統領個人への印象度に関する世論調査で、政権発足当初は51%が好意的に見ていたが、5月の時点で26%まで低下した (La Nación, 14 de mayo de 2008)。
- (23) 出席議員数 (254名) と投票および棄権の総数

(253名) が合わない点に関しては、電子投票システムが完全に機能せず1票が集計されなかった。

- (24) ある世論調査では、クリスティーナ政権の政策決定権は、40%の人がキルチネル党首、14%の人がクリスティーナ大統領が握っていると考えている (La Nación, 2 de agosto de 2008)。

参考文献

<日本語文献>

宇佐見耕一 [2005] 『経済危機後のアルゼンチン キルチネル政権の経済・社会政策』 (『ラテンアメリカ・レポート』 Vol.22, No.2 45-53ページ)。

[2006] 『アルゼンチン・キルチネル政権の中間報告』 (『ラテンアメリカ・レポート』 Vol.23, No.2 45-50ページ)。

篠崎英樹 [2003] 『キルチネル政権の100日と展望』 (『アジア研ワールド・トレンド』 第98号 11月 39-46ページ)。

[2007] 『地方ボスの台頭 ペロニスタ党の組織変容からの一考察 (1983-1987)』 (『ラテンアメリカ論集』 第41号 47-64ページ)。

[2008] 『アルゼンチンにおける『制度化されたポピュリズムの形成?』 メネム政権における政権党内の中央地方関係からの再考』 (『レヴァイアサン』 第42号 79-98ページ)。

<外国語文献>

Partido Justicialista [2008] *Política redistributiva del ingreso y retenciones*, 27 de mayo, Buenos Aires : Consejo Nacional.

<新聞>

La Nación

(しのざき・ひでき / 神戸大学大学院国際協力研究科博士課程)